時代を拓き　世界に貢献する人を目指して

Global View

2017 年 7 月 15 日　Newsletter　第 50 号　仙台白百合学園中学・高等学校　国際教育部

「国際教育の精神的基盤」　国際教育部　Sr. 吉田 めぐみ（宗教科・英語科）

紀元前 1 万年前から始まったグローバリゼーションは、今や歴史、経済、政治、文化、エコロジー、イデオロギーの諸次元で研究されていますが、何を語っても、庶民の経済格差と教育格差が拡大する一方であるという事実は深刻です。2015 年に採択された「我々の世界を変革する：持続可能な開発のための 2030 アジェンダ」は格差社会の是正を目指している目標もありますが、今一つ浸透していきません。そのような状況の中で、グローバリゼーション（グローバル化の過程）やグローバリティ（グローバル化している状態）という言葉自体が陳腐なものに感じられてきます。組織や方法だけが論じられ、精神的基盤が何も語られていないからです。

精神的基盤はあります。イエスが語った「ぶどう園の労働者」（マタイ 20:1-16）に登場する「主人」の考え方です。「主人」は、労働者を使い捨ての道具とみなす「雇用身分社会」の考え方を一言のもとに破壊し、人とその家族を尊重する報酬方法をとります。また、聖パウロが語る「わたしにとって有利であったこれらのこと（知識や実績）を、キリストのゆえに損失と見なすようになったのです。わたしはすべてを失いましたが、それらを塵あくたと見なしています（フィリピ 3:7-8）」「キリストの十字架に敵対して歩んでいる者が多いのです。 彼らの行き着くところは滅びです。彼らは腹を神とし、恥ずべきものを誇りとし、この世のことしか考えていません（フィリピ 3:18-19）」という考え方です。「成果主義」の弊害があります。そこでは「できる、できない」「勝ち組、負け組」「どこそこより上だとか下だとか」「儲かるかどうか」といった、目に見える比較しやすいコードで測られる成果をもってして称賛したり貶めたりすることに汲々とし、人格の変容という人間本来の成長が蔑ろにされる本末転倒の現実の中で、皆が疲弊していくのです。しかし、自らの命を賭して愛を貫き、人の尊厳を守り抜いた生き方に触れたパウロは、成果主義の考え方の中で称賛され誇りに思っていた自分の学歴や知識、実績が、一瞬にして「ただの紙切れ」になったことを実感しました。価値の逆転が起きたのです。

また、パウロが語る「何事も利己心や虚栄心からするのではなく、へりくだって、互いに相手を自分よりも優れた者と考え、 めいめい自分のことだけでなく、他人のことにも注意を払いなさい（フィリピ 2:3-4）」という考え方です。この考えの中には、「おかげさまで」という心が重なって見えてきます。見えるもの知っているものだけではなく、見えないもの知らないもののおかげで今の私がいるというすべてのことに感謝する人は、世の中をつながりとして広く見ることができますし、すべてから学ぼうとし、それゆえに簡単に行き詰ることはありません。

本学園の国際理解教育を振り返ると、視野を広げる海外研修、英語学習の意欲向上を図る語学研修、福祉と平和を学ぶ海外との姉妹校交流、校内でも体験できる国際理解ワークショップや講演会の場を設けてきました。今後は、何をするにしても自分たちの国際的な活動やグローバルな視点が上記の精神的基盤に基づいたものであるかどうかという検証を必須とすることで、本学園の国際教育、グローバル教育の体験が生徒たちや教職員の人格の変容が起こる場となることを念じます。多くの仲間と共に、人の尊厳を蔑ろにする傾向があるグローバリゼーションを根底から覆し、ホンモノのグローバリゼーションを示したいものです。教皇に招かれ、人の尊厳を守り皆を豊かにする経済を語り合った宇沢弘文という先人がいます。私たちはまだ小さなグループです。しかし、ルヴェヴィルの小さな学校が世界に広がったように、先人から学びながら、ホンモノがここから始まるのです。